



特別
ル2
3393
4



122
3393
4

某氏紀略卷之四

川西雜記

萬次郎氏所藏本右折門別錄
嘉永三庚辰歲九月下旬
...



<2000-194(4)>

漂巽紀畧卷之四

川田維鶴 撰

萬次郎促傳藏五右衛門同歸 皇朝之畧

嘉永三庚戌歲八月下旬萬次郎ハホノホトニ上
陸一先寅右衛門ト逢傳藏五右衛門ハトナリト云
リ五里余外ナリト云知キ在ト云シ
乃チ招寄四人既ニ集會シ萬次郎歸朝ノ意志ト
語り今ハト傳藏五右衛門ト之ニ同シ早く便宜ト
聞キ能クハト云ニ獨寅右衛門ハ傳藏五右衛
門嘗テ遠望ノ海ト踰ヘ師作八丈迄ニ至リト



虽も帰志を遂げんと能はん復此に来りて
 生命を勞せんよりや此地を極慣るれば此終
 と没するに如るや一と肯んせれば三人切に諭讓
 すればとも自若として顧みれば如何ともゆるふ
 と能はん卒に寅右衛門の残しけり夫より三人
 相謀けりハ附船有て日本へ至り既琉球国ハ日
 本の南部に在り既朝の便宜之に如くふとなし
 若地方見得れば此の枝船を以て海しふと最良策と
 決吾金山にて得來り私賊多し此の枝船の堅固
 耶紅のものを擇んで買へしと大圓銀百二十夜
 ワンメラ

と以て小船一般船器一切を賒來し日こも便宜
 を待よけり九月下旬の頃メリケ船入港ありて
 日本の人との船に附乗するとの事なり此即ち
 水と訪ぬるに紀伊州日高天神丸九百石積の船頭寅
 吉旺年已下菊次郎三十四市次郎三十三吉三郎二十
 佐藏丸等五名有り元來十三名あり紀伊産の蜜
 柑并に漆器を齎江戸に販り米三百石乾鰯數百
 籃も易飯帳も次相摸洋も漂流し申酉の位洋中
 小若しけり如くハ上船三艘に邂逅し八名ハ二
 箇の舟に其二艘に乗支那へ送り水人として相見れ

吾等五名ハ其一艘ヲ助け上らば今亦の船支那
行の便船ハ心を得て乗易き事ト云傳藏等
これと云し此滅の天幸なりハ与偕に帰朝し
んと船頭、清入同乗を約したるハ寅吉等も大
に悦び一同和睦ましく交會すしとて供に困苦
の話をし出し令せ多江中にも傳藏ハ先年兵庫
人善助江戸人藤兵衛等此地に漂流し来り互に
念ひあけり紀邂逅して皆に相戀以同し帰朝に
しんことと約せしりとも兩度とも船頭の許諾
りし事空しくしりり而今亦も舊念を果

すべしと喜躍すれハ寅吉ハこれと云し其謂知り兵
庫人善助と稱したるハいとハ紀州の産なりし祖父
の世より本藩の武官ありて有し善助の世に至
り大に掌を墜して兵庫の商人高田左嘉十郎と
云りぬ、宗人某のりも一船人となり其漂流
しり飯朝也一頃會し其伯父の死して後
りりしり則ち善助ハ其家と次々其人を以て
命せられ八十石を録と給ふし由吾猶在朝中の傳
聞せしとを語りければ却説萬次郎ハ「^{つて}」在
時桶匠と學得しこと故船衆の爲に桶の破損を脩補

セーリ其謝銀多寡より麦起り終り船衆と争
論し乍ち乗得りたきふとしりれハ傳藏も万に
郎と残し置に此船に乗んこと人情りしりハ船
頭とむゆい寅吉等五名ありとと托みと記辞して
別人とすると寅吉等ハ大に驚き其和睦せんことを
謀せんとも謀とも成なり匡十月中旬迄逗留し是非に
別離と相惜み他日の再會を期すとして終り港
喉と解纜せり是取方て「ノウスマリケバーサ
ムー」のハ大船港より来泊此船支那センバイと
云知し航す。為し船衆傭ふ加んとめまを傳へ聞

り其頭「アイツモ」ロハ「アレバ」この人として萬次
郎ハ嘗て其名を記ちれハ即りて之ハ逢吾等今
茲日本へ皈んと欲す子若日本海まで余等と傭
以賜らむ幸いこれより万りの事といと切に請
りれハ船頭云「ア」ハ支那に至り皈帆ハ船衆傭
易々れとも日本より漢土まで傭夫を得可から
ぶと憂れりとりれハ萬次郎計較して云けふ
ハ傳藏五右衛門兄弟ハ船上に練熟せり其改國
し其用は便しりし余彼二人と余が為し琉球
まで送り賜もらハ天順より余一人ハ支那に至

ふべしとぞきとも備謝のぬ記ハ一錢も賜も
りう丁附乗を許し流ふらと是則ち備謝りうと
敢て請うれば漸々許諾の言を得たりけり
も傳藏五右衛門ハ往昔心願成ずる事りれ今茲
とても必死とすべからずとて土人ハ辰朝のこし秘
し惟漢土行の船衆を備へるもハ須臾の疎
りもべしと告長り別を知りしめは
娶りし故人長ふり流む之を
逃去しとてわいけしとぞ
萬次郎ハ金山より
直ち此に至るべしと少ハツイテ止し告す今又此
約定をりしめれを書を作りて呈て曰僕切し

養育を賜り如き成長りしに至りしに伏願ハ恩澤
の厚き脩身以て忘るべしなり一日もこれに報
すべしと能く思へて傳藏も他国に歸らむと
欲れ其罪固より大なりと此に思ふと虽とも世運條
還再謁の期無き可からぬと君ハ慈悲心と垂仁怨
を加へ給へれし僕平生貯ふる知れ金銀衣械
ハ其よし止し置賜ひ若高一用ハ一助ともりらば僕
り多幸茲より大なりなりし書務文房共ハ僕ハ同盟
の徒ハ傳藏ハ捨せりしと細々字し贈るけり百ト
既ち糸一畢り賒得たる小船装齎とせ本船に

攜へ行き十月下旬船裡合數十名を以て「オアホー」
島と云ふ水賊と成て上陸し波を破るふと三十余

日

四年辛亥歳元旦に當る日二十五度の地より及
以「イツモ」ワに萬次郎と呼ぶ子等横土近行場
や賜うらやまを寄附けし故二人の者を掲置吾
一人孤行をなすと云けし二人若止らば子等止
りて船衆の欲乏の如きは子等の為に吾之を忍
みし懇切の詞を加へて水彼是すの隙に隘路國
を距りて十四里計りて近は是れけしハ早く船を寄

一と騷きし地方より風吹起りし翌日午牌の
頃地方三里計り近つてしける「イツモ」ワ三人の向
つて琉球國咫尺り水に心易く上陸す。ヤと
催促せられ万次郎は寅右衛門つて此事を傳ふと
て急き書を作て曰く「オアホー」分手の後風噴と
得今日琉球國へ上陸す此上ハ本州へ歸らん其
も急ぎ書を作て曰く「オアホー」此の如く手易き事故子等必
ず附船して飯朝一給ふ等しと封緘して「ヲリ」
し「オアホー」へ来る「メニ」止まの如「シヤム」エ
此と云もの、方へ托しやり「イツモ」ワを初船衆

一同へ別と告げしハ「ソツモ」ヨ地圖と出シ萬
次郎と呼止番中隠味方と指示シ此ヨリハ向
ウレ此トは向ハマシト其便所と授ケ且万一上
陸得難クハハリハヨト本船へ飯ヲ来スハト吾
船と止免子号ヲ安否と見届以テ別々トシト洋
子語シ兵トケテ万江郎ハ此れと謝シ菓子並餅
ヲ食由と擣へ艇ヲ梯子方ヲ出ケレハ傳
藏五右衛門ハ小艇と卸シ乘遷リテ直
ニ艇と跳リ下リ先帆と官ヲ傳藏萬江郎トシ
五右衛門ハ楫と運テ指示ラレシト向ハケレ

眩：風波奔狂船ハ之ヲ掀揚ケレハ傳藏五右衛
門驚顛シ况や五右衛門ハ大ニ股栗シ又是漂流
す。ト記ス々奈何シテ可らんヤト頻々傳藏と
呼泣号シ楫も傷ラ得テ是レハ萬以節之ト叱
レ帆と巻楫と奪ハ多ニ無ニテ操立暫眩ニ湾頭
ト至リテ其隙ニ本船ハ早戌亥ノ位遙遠ヲ乘
去一瞬ノ際ニ見失ハケテ程々々其日ハ已落ル
トハ磯と距テトト一里外ニ渴泊シテ翌三日五
右衛門ノ人ハ磯頭ヲ来テ思得二人ト呼起シ懸
視スルニ傳藏ハ二三夜眠ラズヨリ目疲シ

明并なつらされとも釣竿以携へお人三四ふゆり
傳藏船と下り彼人と目し近つけい彼人等傳藏
を見て大い駭き逃趨りしり其中一人返り来り
何やらん云へれ故走りしり応接の詞をわくれ
とも通せし傳藏船の邊に來り聲と掲此地を
通せし傳藏^{可なり}を額と擧りて居たりしり猶ほつて
深念やうい人何れ其故家宅有べし則ち行て訪
ふ如しと万次郎と携へ引返り人家を探し行ち
るふ又四五輩も來りしり傳藏急ぎ近づき
此地何と名くる所なりやと尋れの中より一名右冠元

右の人何れ日本詞を以て琉球国麻文仁間功と
云知りしり云人我がやと問へば此れ二丁計
り行に人家三十戸有りと書し又子等何れ
國何れを此容自とせしり尋ねる故最初本
啓帳より漂流しと久し洋外に在りし其とも
約畧語りしせば彼人首諾して傳藏の疾もたれ
と構ひ傳藏の肩と接吾等見得し事りれは子等
の身重しり此れと謀ふべしかりし心と勞し
賜ふべかりしとして一丁計北へ乗回せば海瀕埠
頭と為す室しに処しと教へる水歸りけし此

引下の際船ハ失張礙と攷るしと一丁汁ハ舵
と止り欠けりハ傳藏ハ今ハ人等ハ別道又船ハ上
リ茶もとも煎し渴腸と淫引下ハ一と五右衛門萬
次郎ハ船中ハ一贈りハ了硝礮と与ハ水と取
下下りセリ其取上ハ人群ハ来リ水と得
ト形語ハ一ハ土人馬硝礮と奪ハ取ハ人家四
五門も有知ハ橋ハ由ハ水と掬ハ且薩芋甘硝等
ト湯罐ハ容リ惠贈セリハ此時家ハハ尤少
ト皆出たり異容リト恠じリハ金ト皆
縦觀して止りハ更話先ハ憐けト加ハ人等

直ニ官ハ祈ハたハ更ハ人會ハ来ハり余等ハ
官ハりの指揮ト以テ来リ因テ船及ハ装齋等ハ
トト余等ハ任他トト各トト船ト沙
頭ハ更上ハ装齋ト並セ官ハ送り又三人ハ早く
官ハ西れハトト之ハ後ハ即官ハ行ハ
並早リト些少ハ食ト授ハ本州ハ失風ハ更件
一条寧驗終リ此ハ三里外ハ此國ハ次府那
覇ト云所ハ送リト更三人押解して申牌
ト以テ上程ト此方ハ兩後ト行途泥殊ハ甚
クハ傳藏ハ脚痛五右衛門萬次郎ハ大小夜も

歩行甚だ根柢いまい、數里りらる水とも日暮炬り
して三更よ及ふ頃那覇へ四丁計り紅所よ及び
那覇より急遽と呼び「オナカ」と云知りて
引返す人しと言来りたれり歩益苦しく松蔭の
午道りる処も延と一死粥美と煨り一睡す隙に
竹兜子と昇来たり三人皆之よに足早り西南へ
行た「オナカ村」に至り農父と覺ゆ家よ入る主
人の名を「ベイ千」と云坐いまい安んせざるも指揮
使来り余よ後ひ来り修めたりして即ち覺ぬ水
よの家より戌亥よ向ひ二町計行又農家よして「ベ

イ千」止りし頭たぬ人の家よつりしけり「吏四
五軍者たり會はせ漂流一件按驗しり概畧する
暇もな曉天とりり多啼聲し聞へり水ハ「ベイ千
」の家よ歸りける四日早より前曾の家よよは
水至りち水ハ薩ナりの吏人槍を随うへりり
漂流一件審問しり携へ来れ枝舩及装齎の諸品
等悉く考問しり又「ベイ千」へ歸り居りり以後
此「ベイ千」の家官舎とりり「ベイ千」ハ前隣へ
茅舎と築き妻處ハ「シグア」ウシグアと云へる女
兒八人と掣りし之を僑居しり
此地薩早のハ終年種入色蕉と作し婦女

皆蕉布と織りしり其色とも其
実の食ふつにそのとんを

官舎の薩戸の吏五

人流球の吏二名皆五日七日の交代して三人と
守道一三人の食麦等の流球の庖丁来り厚具す
其品類ハ飯と除ハ外豚肉雞卵芋類豆腐魚類等
とす此頃流球王より和製の夾服單衣帶等新造
のより及ハ焼酒一斗と三人ハ賜し以後夏候
ハ八蚊袴二張と賜り七月十一日薩戸の吏上
下七名鎗二柄と随ハ騎馬来て未だ三人と
那覇ハ送るもハ一同設装何々しと急ハ
新衣と着肩輿ハ乗りハ村民の面識人来り候と

沾也共ハ別きと懐しけり黄昏ハ及ハ那覇の
港頭ハ達し薩戸の官船ハ上りりハ七名の吏
も之ハ上り三人と擁護し杖船及装齋も又此船
ハ入也天候と待り淹留數日同月十八日天清風
順即ち那覇と出港し薩国の位ハ向ハ走るも
多日七月晦薩州山川ハ港集ハ入八月朔小船二
般ハ勿り乘夜間鹿兒洲ハ集ハ到り即ち上陸
し西田街下會所と云知ハ置り水守者日ハ来り
固めけりハ薩戸候より命りて食麦及ハ百
端皆漂民の需ハ応し丁寧とて一日ハ置

酒貴客のふとし殆と之に飽食せり後又候余も
て衣服一貝金一兩と尽く三人へ賜ひけり
月十八日 大府へ上聞有るに長等へ送る
との命あり即日鹿島洲發程す随槍め士五名從
吏五名警固ありて枝船裝齎等ハ人夫も運も徒
歩も廿二日向田と云知り至り河船より上り
行事十三里ありて京泊と云知り至り記号と添
り紫箔幕を垂たり勢騎船に轉乘し西北より走
り二十九日長等大奥に到り十月朔旦上陸し官
廳へ上り庭上の名に水漂流り状大畧参稽あり方九

寸計りの真鍮板面へ人形を彫したるものと出
し三人皆之を踏みしめて悉く命の如く踏了り
りれハ幕府の宰牧志摩侯の實檢と拜し佐倉街
上り屋の宰置せしり其後ハ及以毎ハ官庭ハ名
に水携へぬ器械數十品ハ一萬江郎ハ得來り
知り萬國地圖とつて泊中諸所ハ事實盡くその
往復終り上り迄して三日関戸の罰と蒙り解罰
ハ後和俗ハ容装と免許ありて初て額髪と削りけ
り此頃往年「オアホ」して相識たりし他伊ハ宿を
已下五人清国へを護送せり水上り屋へ來りて與

小恙りく帰朝し又奇遇せしと相驚記を質し洋外
泊中の憂慮を語りたり

五年壬子歳三月寅吉等ハ紀伊州より迎ひの吏来
たり又の後會と約し終り別れと惜けぬりけり
此より三人ハ吾本州より七日りん迎ひ来た
り賜けり。つれも指と屈し待居けるは六月廿
三日本州より科官堀部某以下十六名浦吏一名三
人の家族の人二名等来り官庭より召されけりハ
正面牧彦及以下以下の大吏側席し本州の吏堀部
某側面より座し浦吏及三人ハ庭上より跪きりる暇に牧彦

漂流の畧事且泊中天主教等傳へ得るを以て本
州へ返る以下漫々藩外へ出すべし。若死
とせば上討たし。又寅右衛門ハ外国に占居
し重助ハ死したる莫宗族へ傳ふ可化の一過
拜聽し三人の通称と書寫したるものへ第三指の
爪尖と印し了り携へる。器械中砂金銀錢銅錢
横文書藉記録銃、茶津外ハ篋ラクタン止の側量器
を除外船の具悉く名上らば砂金銀錢銅等ハ
日本銀よりこれを賜へり其他の器械皆令せ賜
ひ官廳を退き即刻旅亭西川へ至り二十五日と

以て長崎と發程一海陸天順と得七月九日本州
の国界の臨川用居閑と諭十一日高知城下に入
浦門街頭の旅亭松尾と以て宿処を余せらる夫
より日下糾官庭の名を水漂流の濫觴より泊中
の行状と詳し尋問所の地圖と以て紀西有る夏
三長崎廳上り如くおして九月廿四日お及び融
状悉くおり生涯海上の業と禁せられ儉身尊録
を賜り歸浦の赦免と拜し十月朔旦と以て依り
とて高知と發程一日暮お及び宗佐浦にお歸り
られの傳藏等の家にお朽盡し今何れ知らる事

も分明りらす叔弟傳藏漂民傳藏の叔母ハ傳藏と
いへる者の妻たり故に
洋外もて華移をすハ其傳の稱と繫ひり此傳
藏ハ其傳藏の千おして即ち父の通稱とおお
伝傳藏と呼りと云り的一家の寄宿せしハ親
昨年四十五
旅故舊群り来たり長し艱苦と物語り奉生獻款
りしとせらるハり萬次郎ハ翌宇佐浦と上程し
五日午後伴り濱にお歸り至りハ老母猶存生し
兄悦助万は郎幼りしとき父悦介死したしけり
が兒皆幼若して家を立てたにけり村
人某と義子とあり姉女世喜と
之に娶し即ち父悦助の孫と繋り姉世喜取藏弟熊
吉妹梅等俱に賀杯と挙げ皆淡秩と云りけり
て彼攜へぬる萬國地圖ハインキラ人ハ精

選りし彼国紀元千三百四十四年弘化二年新造

り水ハ其詳密ニ備具不當たりと往々世々行まし

り、比々化知まあり然し備中各処の名称ハ如こ

彼国の横文と写頗多讀ま便りしらこれハ画史川

田維崔と斜官ハ名多此新之ハ道と摸臨ハ萬次

郎として横文と讀せられしと国字ハ翻譯ハ官收

たるとハ命ハあり十月十九日と以て主筆セり

此圖落成ハ後ハ航海側量ハ術斜ハ心ハらんとり

事と以て官議ハ固リ十二月十二日ハ萬次郎ハ晋代

臣下ハ命セられし永く国恩ハ辱と拜し奉る卷之四終

